

伊勢神宮の御師廃止と参宮者の 関係性再構築に関する調査研究 ニュース・レター

科学研究費助成事業〔基盤（C）〕、研究代表者：櫻井治男、課題番号：26370072

No.5

平成 29 年

(2017)

3 月 30 日

禁無断転載

An Investigative Study on Reconstitution of a Support Network for Ise Jingu Pilgrims after the
Abolishment of the Pilgrimage Facilitator System in 1871

皇學館大学文学部櫻井治男研究室◎

516-8555 三重県伊勢市神田久志本町 1704

- 目次
- 御師廃止後の旧御師と参宮者の関係性再構築—埼玉県を事例として②—
 - 谷口 裕信 1
 - 「中川采女家資料」の整理と内容 八幡 崇経 8
 - 三か年の研究を終えて 櫻井 治男 11

御師廃止後の旧御師と参宮者の 関係性再構築 —埼玉県を事例として②—

谷口 裕信

前稿（ニュース・レターNo.4 掲載）に引き続いて、旧檀家との関係性再構築に向けた旧御師の働きかけの実態を、埼玉県立文書館所蔵の史料に基づいて検証したい。

前稿では、授与大麻送付に際して「従来ノ御交誼」「御縁故」を掲げ、関係性再構築を目指そうとした杉木権大夫の事例、または師檀関係の流動化をむしろ積極的にとらえ、御神楽奉納や教会講社への寄付における「元御師ノ慣例」の適用範囲を、旧檀家以外にも広げて師檀関係の再編を試みた腹巻大夫の事例を取り上げた。

本稿では前稿で明らかとなった、旧御師から旧檀家への働きかけの背景

にあった師檀関係の流動化という問題について、三日市大夫次郎の事例を検討し、それが関係性再構築にどのように影響したのかを考察する。

(C)三日市大夫次郎

三日市大夫次郎は、岩淵町に屋敷を構えていた外宮側の御師である。檀那場は上野国では利根郡・勢多郡・山田郡・新田郡など（現在の群馬県東部）、下野国では足利郡・梁田郡など（現在の栃木県南西部）、陸奥国では安積郡・白河郡・磐前郡など（現在の福島県中通り南部～浜通り南部）であり、このほか現在の山形県、宮城県、岩手県、秋田県の一部と広範囲に及んでいる。したがって配札数は 377,269 体、総収入額も 9,109.123 円（うち止宿料は 1,013.187 円）に上り、有数の経営規模を誇った御師家の一つである（明

治 12(1879)年調査、『神宮御師資料外宮篇三』)。

御師廃止後も三日市大夫次郎は、参宮者との関係性を保持しようとしていた。明治 17 年には同じく旧御師の龍大夫とともに、参宮者の便宜を図るべく、諸街道の信用ある旅館と提携する「御師講社」を設立した(『伊勢市史 第四巻 近代編』)。また旅館と提携するにとどまらず、自らの屋敷を旧檀家が参宮した際の「参籠所」としており、旅館業を営んでいたことも分かっている(『神都名家集』、石川論文)。

ただし御師廃止後における三日市大夫次郎と参宮者との関係性を、旅館業によって媒介されていた、とするだけでは不十分であろう。伊勢参宮という行為を、信仰とは全く無関係なものとはできまいし、何よりも三日市大夫次郎の屋敷が、御師廃止後も依然として旧檀家の「参籠所」となっていたという表現にも、そのことが明瞭に表れている。

それでは三日市大夫次郎が、埼玉県北足立郡志木町(現在の志木市)在住の西川武左衛門宛に送付した書類を検討してみよう。書類は日付順に①(明治 35 年 9 月 23 日付)伊勢国山田町尊皇教会本部会長子爵慈光寺恭仲・三日市大夫次郎書簡(西川 898-2)、②「尊皇教会員募集世話係委嘱状」(同年 10 月 1 日付)(西川 898-1) 尊皇教会本部会長子爵慈光寺恭仲、③「参拝の時道中心得」(西川 883-1) 敬神愛国指導者尊皇教会本部三日市大夫次郎、④「伊勢山田町尊皇教会本部三日市大夫次郎邸宅之図」(西川 883-2)、⑤「伊

勢両宮日月参大々神楽優待会員名簿」(西川 883-3) である(③～⑤は 10 月 7 日付で発送の封筒に一括)。尊皇教会とは、教派神道一派である神理教を布教し、信徒の結集を目的とする教会講社であって、明治 33 年 6 月 7 日に三重県知事より設立認可を受けた(⑤)。

①には、尊皇教会本部会長子爵慈光寺恭仲と、三日市大夫次郎(③によれば敬神愛国指導者)の連名による書簡が付されている。自らの使命を「三日市邸宅ハ諸君ノ祖先ト生ガ祖先ヨリノ賜モノニシテ、世上無比ナル親交ヲ永遠ニ保持シ、従来檀家ノ諸君ニ対シ其義務ヲ尽スハ、不肖大夫次郎ノ本分ナリ」と述べ、互いの先祖が代々培ってきた三日市大夫次郎と旧檀家との関係をその根拠としている。しかしその関係に安住しては「世ノ変遷時ノ風潮ニ拠リ、今ヨリ数年ノ後相互ノ子孫ニ於テ自然親交ノ疎ニ流ルハ」可能性を同時に指摘する。そこで「敬神尊皇ノ元趣ニ則リ尊皇教会ト唱へ、相互ノ祖先ヨリ享有セシ賜モノタル大夫次郎ガ邸宅ヲ挙テ諸君ノ共有ニ移シ、諸君ガ参拝ノ時無料ニテ宿泊セラルハ一大安全保護ノ本会則ヲ遂行」する、いわば「一大共有参拝参籠倶楽部」を設立し、そのために旧檀家を「基本資財作成ノ為メ…改メテ会員」とすることを提案するのである。そして①に付された「尊皇教会員加盟並に優待法」によれば、ひとたび会員となると「子孫の末に至る迄、本会定期大祭典大々御神楽奏行期日に参拝する会員は、御神楽殿に参列し御供物の配与を

受ける事」ができるとされた（句読点・濁点は筆者。以下同じ）。

三日市大夫次郎は、これまでの旧御師と旧檀家との関係を、「尊皇教会」に再編しようと試みたわけである。とはいえ三日市大夫次郎が指摘するように、旧檀家との関係は次第に薄れつつある状況の下で、旧檀家を「尊皇教会」に糾合できるという見通しが、三日市大夫次郎に果たしてあったのかとの疑問が生じる。

その答えを導く鍵は、三日市大夫次郎家の「来歴ヲ賞賛」し、「尊皇教会」の設立に「賛助」を与えた子爵の慈光寺恭仲が、その本部の会長に就任したことであろう。慈光寺家は宇多源氏の流れを汲み、神楽を家職としてきた旧公家であって、明治 17 年に有仲（恭仲の伯父）が子爵を授けられた（『公家事典』）。三日市大夫次郎はこのような由緒ある名家の当主である恭仲—有仲が没した明治 31 年に家督相続、襲爵した（『平成新修華族家系大成』上巻）一を、尊皇教会本部の会長に迎えたのである。旧御師と旧檀家との歴史的な関係性からすれば、尊皇教会会長には本来、三日市大夫次郎がなるべきところ、あえて旧檀家とは何の縁も所縁もない恭仲を会長に迎えたのは、三日市大夫次郎にはない、子爵家当主というネームバリューを利用しようとの意図によるものであろう。旧檀家に対して尊皇教会が信用するに足る組織であることを示し、かつ恭仲が三日市大夫次郎家の「来歴ヲ賞賛」したとわざわざ記して、旧来の師檀関係の記憶を強化し、旧檀家が尊皇教会へ移行するのを

後押しするねらいもあったとみられる。師檀関係が希薄化しつつある状況下では、もはや三日市大夫次郎の名前だけで旧檀家をつなぎとめられなくなっていたということだ（教会講社が会長に華族、とりわけ旧公家を迎える事例については、拙稿 a を参照されたい）。

子爵家当主たる慈光寺恭仲のネームバリューを利用した、①と同様の事例を、実は⑤においても確認することができる。⑤は尊皇教会に提出する入会届であるが、その前に「本会の名誉賛成員」が以下のように紹介されている。

正三位勲壹等子爵	(東京)	渡邊 昇君
陸軍少将	(東京)	藤井包総君
前衆議院議員	(静岡)	寺田彦太郎君
衆議院議員		松嶋廉作君
前衆議院議員	(長崎)	臼井哲夫君
前衆議院議員	(静岡)	永井嘉六郎君
国学家	(東京)	内藤耻叟君
東京感化院長	(東京)	高瀬真卿君
東京日々新聞記者	(東京)	鍋田氷邦君
東京日々新聞社員	(東京)	木川忠一郎君
下野日々新聞記者	(下野)	石倉翠葉君
小文芸記者	(東京)	信田葛葉君
東京通信社	(東京)	野井數太郎君
川崎銀行主	(東京)	川崎八右衛門君
日本精糖会社専務取締役	(東京)	

鈴木藤三郎君

商業新聞社主 (遠江浜松) 相佐新次郎君
静岡県浜名郡会議長 (遠江) 松嶋十湖君

このほかにも「全国ニ名望家賛成員多数アル」が、ここで「名誉賛成員」として紹介されているのは、中央・地方の政・官・経済・言論・文化界の人

士 17 名である。例えば筆頭にある渡邊昇は旧大村藩出身で、大阪府知事（明治 10 年～13 年）、元老院議官や参事院議官、会計検査院長（明治 17 年～31 年）などを務めた官僚（『日本近現代人物履歴事典』）。7 人目の内藤耻叟は水戸学鎮派の歴史家。維新後は水戸を脱して各所を転々とし、帝国大学文科大学教授を務めたほか、国学院でも教鞭をとった（『明治時代史大辞典』）。

問題は「全国ニ名望家賛成員多数アル」中から、なぜこの 17 名が特に選ばれたのか、である。この顔ぶれからすると、「名誉賛成員」が有するネームバリューが基準になっていたのは間違いない。旧檀家が「名誉賛成員」の肩書きを見れば、尊皇教会が怪しい団体ではないことが分かり、働きかけに応じて入会してくれるのではないか、という尊皇教会側の狙いが透けて見える。子爵家当主が会長を務めていることとあわせて、尊皇教会への信頼性を高めるための方策だったのだろう。

一方で 17 名の「名誉賛成員」が居住する地域に着目すると、半数以上が東京であるが、次いで静岡や浜松が多い。ところがこれらの居住地域は、先述した三日市大夫次郎の配札地域（＝栃木県・群馬県以北）には含まれていないのである。その点で 17 名は、基本的に旧檀家とは無関係であるようにみえる。そのような「名誉賛成員」の居住地域名を出したところで、旧檀家にとってほとんどアピール材料とはならないはずだ。にもかかわらず

「名誉賛成員」の居住地域名を尊皇教会がわざわざ掲出した理由とは、一体どのようなものだったのだろうか。

その点に関して見通しを多少述べてみよう。②によれば、西川武左衛門は「敬神愛国篤志」につき、尊皇教会より会員の募集世話係を委嘱されたが、武左衛門が住んでいた北埼玉郡志木町は、実は三日市大夫次郎の配札地域からは外れている。つまり西川家は、三日市大夫次郎の旧檀家ではなかった可能性が高いにも関わらず、武左衛門は三日市大夫次郎が発起した尊皇教会の組織づくりを担わされたということになる。ここで考えられる一つの可能性は、もともと西川家は三日市大夫次郎とは別の御師の檀家であったが、御師廃止によってその御師との関係が完全に断絶してしまったため、その後何らかの経緯により、三日市大夫次郎の新たな「檀家」になった。尊皇教会が会員の募集世話係を委嘱したのは、武左衛門を「敬神篤志名望家」と認めたとによるものだが（⑤に添付の尊皇教会規約）、根底にあったのは、御師廃止後において新規に構築された「師檀関係」だったのではないかと、いうものである。それなればこそ、御師廃止前からの配札地域における名士を持ち出すよりも、それを超越した各界の人士を「名誉賛成員」とした方が、武左衛門ら会員募集世話係の募集活動にとって好都合であると、尊皇教会側が考えたとしても不思議ではない。

それでもなお疑問は残る。17 名の「名誉賛成員」の大半が居住していた

東京は日本の首都であり、そこで活躍する人はともかくとしても、なぜ静岡や浜松に居住する者の「名誉賛成員」を5名もそろえたのか。いくら三日市大夫次郎の旧配札地域を除外するとしても、それが静岡や浜松である必要性はないし、非旧檀家ないしは「檀家」への訴求力という観点からは、一つの地域に偏るよりも多くの地域の「名誉賛成員」をそろえた方が適当ではないだろうか。この点については、今後さらに検討を要するところである。

さて③には、「本会は全国敬神愛国の志士を結合する事なれば、諸君挙て世話係りとなり、多少に不拘募集の御尽力蒙り度」とあり、尊皇教会から募集世話係の西川武左衛門に期待されていたことが、新規の「檀家」＝尊皇教会員の掘り起こしにあったことは明らかである。「檀家」を糸口として新たな「檀家」＝会員を獲得しようという尊皇教会のねらいは、同様に③にある次の文言にも表れている（下線部は筆者）。

同行中に一名たりとも旧交誼あらば、当三日市大夫次郎を親戚の心持、二千年來の旧交を重んじ第一に当家に着せられたく、其同行幾百人の多きも幾千人一時に宿泊する設備完全、殊に全国公供（ママ）の為め設けたる事なれば、
会員と否とに拘らず、参拝の案内保護を致し、益世利民の実を得せしむるが本会当三日市家の国民に対する義務とす。故に遠慮なく同行者を連れて来着を願ふなり。

「同行中に一名」でも三日市大夫次郎と「旧交誼」、すなわち師檀関係にあったならば、親戚を頼るよう三日市大夫次郎を訪ねてもらいたい。同行者の人数が「幾百人」「幾千人」であろうとも（この数字には誇張があろう。「伊勢信仰のシンボリックな建築御師「三日市大夫次郎」邸の想定復元」によれば、明治39年～40年頃の実測平面絵図から割り出された客室畳数合計288.5畳から試算して、宿泊人数は96人程度だったとされる）、また尊皇教会の会員でなくとも、「参拝の案内保護」をするつもりであり、それは「本会当三日市家の国民に対する義務」である、とまで断言する。

三日市大夫次郎が尊皇教会という組織を通じて、参宮者の取り込み、囲い込みに躍起になっていた様子がうかがえよう。その背景にあったのは、一つにはすでに指摘したように、御師廃止後、旧檀家との関係が次第に希薄なものになっていたことへの危機感である。それとあわせて、西川武左衛門のような、御師廃止後に「師檀関係」を構築する途上にあっただと思われる者（「新檀家」）への期待である。いずれにせよ、三日市大夫次郎と旧檀家・「新檀家」との師檀関係は、不安定ないしは脆弱な状況にあり、これらを一本化＝再編して強化していく試みが、尊皇教会の設立であったとも言えるのではないか。「本会員は新旧に拘らず同一の資格を有す」（①）としているのも、旧檀家と「新檀家」の一本化が尊皇教会の目指す方向性であったことを裏書きしている。

背景の二つ目として指摘しておきたいのは、他の参宮者宿泊施設に対する三日市大夫次郎の対抗意識、警戒感である。③の上部には尊皇教会員に向けた、「参拝の時わ（ママ）必ず持参して自衛の策を守る」という文言があって、ひときわ目を引く。尊皇教会員は何に対して「自衛」策を取るのか。三日市大夫次郎は「諸君が遠路の旅行せられるにも、皆な道中の宿屋が連絡をして表面旅行者に対し親切らしく謂ふも、（中略）其費用は次の宿屋が謝礼と費用を見込て賄ひ、膳部の内を減じ粗糲に成に違ひなし」と、道中筋の宿屋の遣り口を暴露して、旅行中の荷物の運搬を宿屋に託さないように注意を促した。また尊皇教会員が「自衛」すべきは、宇治山田に到着してからも同様であり、「弊害ある町宿姦商」への警戒を呼び掛け、尊皇教会員ならば三日市大夫次郎邸に「無料宿泊の利益不尠」ことを念押ししている。

道中筋や宇治山田の宿屋の実態が、果たして三日市大夫次郎が言うようなものだったかの確認は、本稿の範囲を超えるが、明治17年の御師講社の設立は、三日市大夫次郎がそのように状況を認識していたことの現われだった。また宇治山田では御師廃止後の師檀関係の流動化が、三日市大夫次郎のような旧御師系の宿屋と、それ以外の「町宿」との間の参宮者争奪状況を招いていた。参宮者はその状況を利用して、より自分たちに有利なサービスを提供してくれる宿泊施設を選択する動きもあった（拙稿b）。三日市大夫次郎は競合相手である「町宿」に尊皇

教会員が流れるのを恐れ、尊皇教会員を足掛かりとした参宮者の取り込み、囲い込みに乗り出したと見られる。

そこで三日市大夫次郎は、会員が道に迷わず尊皇教会本部にたどり着けるような資料を作成した。尊皇教会本部が置かれた三日市大夫次郎邸の位置を、「伊勢山田駅停車場（現 JR 伊勢市駅、筆者注）より三丁目左に入りてあり」と説明するだけでなく道筋を図示し、さらに邸宅および邸宅前の様子を描いた図（④）まで同封する念の入れようである。ちなみに④は、平成10年（1998）に大林組が三日市大夫次郎邸の想定復元作業に取り組んだ際、その基になった三種類の絵図・写真類のうちの一つである。明治39～40年頃に実測して作成されたと判断される三日市大夫次郎邸絵図（菅原洋一論文）と比較しても、三日市大夫次郎邸の「全体を正確に表現している」とされたものである（大林組プロジェクトチーム論文）。門には「三日市大夫次郎邸」と「尊皇教会本部」の札がそれぞれ掲げられ、門前にも同名の石柱のほか、「檀家」から献納されたと思しき石灯籠が建てられていた。門前の隅櫓の傍には「伊勢両宮大大御神楽記念石」が描かれており、これらを目印にすれば尊皇教会本部を会員が間違えることはあるまい。

会員が門をくぐると前庭が広がっていて、その先には玄関が見える。到着した会員を教会本部がそこで出迎えている。前庭には人力車が数台待機していて、繁盛している様子が見える。また門前の隅櫓の傍にある「紀

念石」には、「明治三十一年一月 群馬県上野国勢多郡 新里（カ）共和」とあり、そう遠くない時期に「檀家」ないしは会員によって建碑されたと分かる。④のこうした状況を「檀家」→会員や会員予備軍が見れば、尊皇教会は熱心な会員によって支えられていることが読み取れただろうし、それこそが尊皇教会側のねらいだったはずである。

おわりに

以上、三日市大夫次郎による旧檀家との関係性再構築の実態について、尊皇教会という組織を通じた働きかけを事例に検討してきた。

三日市大夫次郎は歴史的な師檀関係を重視しつつも、それに安住することを良しとしていては今後の発展は見込めないと考えた。そこで旧檀家はもちろんのこと、御師廃止後に関係性を構築した新規の「檀家」も含めて尊皇教会の下に一本化して会員とし、「師檀関係」の再編強化を図ろうとした。さらにそのような尊皇教会員を糸口として、いわゆる「町宿」に流れていく参宮者を尊皇教会に囲い込もうとした。これは前稿において検討した、杉木権大夫や腹巻大夫にも見られた方向性である。しかし三日市大夫次郎の場合、尊皇教会の敬神愛国指導員となり、会長には子爵慈光寺家の当主を迎え、あるいは「名誉賛成員」の顔ぶれを旧檀家の範疇から脱却させようとしていたことなどが分かった。尊皇教会の会員勧誘に関する史料が比較的まとまって残されており、三日市大

夫次郎の戦略をより明確に読み取れたことは、本稿の成果であるといえるだろう。

関係性再構築を、三日市大夫次郎が必死に模索していたことは分かった。しかしアプローチを受けた側（本稿では西川武左衛門）が、果たしてどのように対応したのかという点については解明できておらず、今後の課題となる。また尊皇教会の運営という観点からすれば、尊皇教会に納入する会費は会員の種別に応じて、1円～3円、3円～5円、5円～10円、10円～30円、30円～となっていたが、これは入会時一度限りであった。納入された会費のうち20%を授与大麻の郵送料、通信料として銀行に積み立て、50%を「布教施行用其他本院維持費等」に充て、残りの30%を「参籠所増築並修繕費」として銀行に積み立てるという（前掲史料⑤）。果たしてこれで経営が成立したのだろうか。種別ごとの会員数など、尊皇教会運営に関する史料がないことには、これ以上議論のしようもない。これもまた今後の課題である。

参考文献

- ・石川達也「明治二十七年 伊勢参宮道中日記」に見る伊勢参宮（『皇學館大学研究開発推進センター神道研究所紀要』30、2014年）
- ・大林組プロジェクトチーム「伊勢信仰のシンボリックな建築 御師『三日市大夫次郎』邸の想定復元」（『季刊大林』43、1998年）
- ・菅原洋一「三日市大夫次郎邸に見る

近世伊勢御師邸建築」(『季刊大林』43、1998年)

- ・谷口裕信 a 「宇治山田における教会講社の展開―日露戦争前後の事例から―」(『皇學館史学』23、2008年)
- ・谷口裕信 b 「近代の伊勢参宮と宇治山田の旅館業」(『明治聖徳記念学会紀要』50、2013年)
- ・『伊勢市史 第四卷 近代編』(伊勢市、2012年)
- ・霞会館華族家系大成編輯委員会編『平成新修華族家系大成』上巻(霞会館、1996年)
- ・皇學館大学史料編纂所編『神宮御師資料 外宮篇三』(皇學館大学出版部、1985年)
- ・橋本政宣編『公家事典』(吉川弘文館、2010年)
- ・秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』(東京大学出版会、2002年)
- ・宮地正人、佐藤能丸、櫻井良樹編『明治時代史大辞典』2(吉川弘文館、2012年)
- ・三谷敏一『神都名家集』(1901年)

「中川采女家資料」の整理と内容

八幡 崇経

資料の内容的特徴

本研究で対象とした「中川采女家資料」とは、近世末から昭和初期までの伊勢神宮への参宮者の記録である(『ニュース・レター』No.1 拙稿参照)。中川采女家は、伊勢神宮の内宮の禰宜家であり、御師も兼職し全国に檀家を有していた。檀家地域としては、『神

宮御師資料』(皇學館大学史料編纂所編)によれば、伊勢、奈良などとするが、「御祓大麻」の銘として「中川采女家」を利用した神札の配布先には、九州北部の筑前、筑後、日田地域など(現在の福岡県・大分県)広い範囲が含まれている。本資料は、この九州北部地域からの参宮者の名簿が中心である。



資料の内容については、中川采女家で行なわれた神楽と祈祷の奉納金額と住所氏名である。しかし明治4年の神宮改革以後、御師私邸での神楽や祈祷は廃止になり、明治5年にまず内宮に、続いて明治8年に外宮に祈祷所が新たに設置されたので、改革以後の奉納金額の用途は今のところ不詳である。旧御師については、改革後に神宮への神楽祈祷の取り次ぎに手数料が補償されていたようで、積極的に従来通りに受け入れていたものとも考えられるが、尚金額の記載には検討の余

地がある。

このような変化はありながらも資料名としては明治4年以後、明治43～44年頃まで「御祈祷姓名簿」が慣例的に使われていた。その後、明治43年からの資料名は「参宮記念名簿」となったが、制度上の変化があったとおもわれる。

さて記載された詳細な地域名・番地などからは、檀家の範囲を知ることができ、同一地域内に複数のグループが形成されていたことをうかがわせる。

さらには、同一地域からの参宮記録が長期間にわたっているので、参宮の頻度、グループの規模構成の変遷などを知ることが出来る。

明治中期以後になると、氏名に年齢が記されている場合がある。これにより参宮グループの詳細な構成が分かる。これらは、地域の民俗事例と照合することにより、地域における参宮の実態をより具体的に知ることが出来る要素とすることができる。以上の点から、「中川采女家資料」は近代の伊勢信仰にともなう参宮動向を知る上で貴重な資料といえよう。

以下、資料の内容分析より把握した特徴を列記しておきたい。

①参宮の形態が近世においては、地区の参宮組織内で選ばれた人による「代参」から、近代にはより多くの地域の人々が参宮する傾向が高くなるのが指摘できる。代参自体は、近世には藩による旅行の制限によるが、明治に入り、この制約が解かれたことにより、同じ地区から多くの参宮者があったことがわかる。ただし、個人と

いうよりも、なお組織的な参宮の傾向があることは、近世の檀家組織としての参宮形態の名残だと考えられる。

②参宮組織の規模は、小字単位以下が主で、そのため大字内に複数の参宮組織が存在するケースが多い。また大字内の各グループは、同時期に参宮していたことが分かる。これは近世に御師が檀家地域からの参宮を同時期に勧奨したことによると思われる。

③参宮組織の中でも明治中期以降、「同行（どうぎょう）」という呼称でグループが把握されている場合が見られる。この「同行」という組織は、北部九州の各地でみられる男性を中心とした参宮組織で、地域内では年齢集団に分類されるケースが多い。地域により「参宮同行」「伊勢講」などの名称があるが、その大きな目的の一つは伊勢参宮であった。

同行は、既婚の青年男子が、同年もしくはある程度の年代の幅の同じ地域内の知人をもって組織する例が多い。地域の年中行事を直接担当する事例はあまりなく、毎年定期的に親睦を深める機会を持ち、冠婚葬祭などの付き合いを通じて終生関わりをもつケースが多い。このような同行の組織を青年時に結成し最初に行うのが伊勢参宮と位置づけられている。福岡県内の場合、伊勢参りの次には修験で有名な英彦山参りを重要な参詣対象とする地区が多い。

④近代の参宮の時期は、多くが2月中旬から4月中という傾向で、近世来の農閑期に参宮をする慣例を引き継ぐものと思われる。

資料のデータ加工

中川采女家資料の活用のために、利用の便宜を図る上で、各名簿の内容をデータ・ベースとして整理を試みた。

江戸末から昭和初期までの参宮資料については、記載された住所、氏名、年齢、金額、その他、付記された事など全項目を取り上げた。また記載の地名を同定し、地域分布を把握できるように地図化した。

北九州の伊勢信仰調査と課題

中川采女家の参宮資料をもととした実態調査については、筑後川水系の大分県の日田地域の「日田市」から福岡県の筑後地域の「うきは市」周辺と、福岡県の北部、筑前地域の中から宗像市、糸島市、さらには中川采女家の檀家は少ないが、佐賀県内の吉野ヶ里町、佐賀市などの伊勢信仰関係地の調査を行った。

また、福岡県教育委員会がまとめた「福岡県の絵馬」を参照し参宮絵馬の残存状況調査を一部実施した。また、佐賀県内の市町村史を参考に、伊勢講碑（大神宮碑）の調査を行った。

さらには中川采女家参宮資料と、内宮御師だった岩井田家資料の調査を通じ、北部九州における伊勢信仰の実態調査を行ったことにより、今までに指摘されていない近代における伊勢信仰の実態に迫ることができた。それらの結果は、次の通りである。

①中川采女家資料の示す地域には、現在も太神宮碑など伊勢神宮に関係する記念物が残されており、伊勢講についても語り継がれている。

②「福岡県の絵馬」によれば、伊勢参宮記念の絵馬が相当数残されていて、そのほとんどは神社拜殿に飾られている。

③太神宮碑については、神社境内に設置の場合もあるが、多くは伊勢講の単位となった地域毎に本来設置されていた場合が多い。

④調査をした九州北部地域には、藩主が支援をし、勧請したとされる伊野天照皇太神宮（福岡県久山町）、櫻井太神宮（福岡県糸島市）や、佐賀県内には、御師が拠点とした、田手太神宮（吉野ヶ里町）、蠣久太神宮（佐賀市）、それらは後に藩主の支援を受け伊勢神社（佐賀市）として城下に勧請された歴史をもつ神社が今日も存在している。これらは、御師の布教活動を通じ、また後には藩主により信仰されたことにより、近世を通じて地域の伊勢信仰の拠点神社となっていた。

⑤近世の御師を仲介者とする地域の伊勢信仰は、明治に入ると御師が廃止されたため、変化を余儀なくされた。御師が提供してきた宿泊、旅行のための世俗的なサービスは、旧御師が共同で施設を運営した。中川采女家は岩井田家などと共に、神州館という旅館を営み、九州の檀家を対象として共同での受け入れるようにしたが、新参入の旅館業者とも競合した。

また御師が毎年檀家地域を回り伊勢への奉納金の収納や参宮情報の提供を行っていたことは、参宮記念名簿に新たに詳しい地番、年齢、組織の中に代表者を指定し管理するようになっていった。御師制度廃止後も形を変

え、伊勢講自体の拡大再編を試みた旧御師の家（岩井田家ほか）や伊勢神社のような例もあった。

⑥一方、御師が行った活動のうち、聖的なサービスであった「御祓大麻」の頒布や神楽祈祷についても廃止され、国の関与のもと、神楽祈祷については神宮が直接行うようになり、神札については「神宮大麻」と名称が変更され、国や奉賛会組織の新設、昭和初期の全国の神社組織を通じた頒布へと移行した。そのため旧御師が支えてきた伊勢信仰のあり様は、次第に減退を余儀なくされることとなった。地域の人々にとっても旧御師としての「聖職者」との意識は、世代や時代を経る毎に失われていったと言えよう。

今後の検討課題

中川采女家資料で作成したデータ・ベースの情報を元に、広域にわたり分布している地域における伊勢信仰の実態がどのようなものであったかということを調査することが可能となる。また旧御師として明治以降も組織を変えつつ檀家を受け入れてきた岩井田家の資料を参照することにより、下記のような視点が想定される。

- ①御師が提供してきた世俗的なサービスである宿泊、旅行などの近代の様相と変遷
- ②参宮記念物の存在の分布、参宮日記などの資料の収集
- ③伊勢信仰習俗の「同行」組織の実態と英彦山信仰、寺院宗派などとの関わり。
- ④地域神社、特に伊勢信仰の地域に

おける拠点神社と伊勢信仰の変遷。これらの調査をふまえてさらに明治以降の神社行政の時代的な変化と地域の伊勢信仰がどのように連動していたかということをより詳細に把握することが可能となろう。

三か年の研究を終えて

櫻井 治男

研究の背景

本研究の背景には、平成 23 年度～25 年度に科学研究費の助成を受けて実施した「近代の伊勢神宮改革と御師制度廃止に伴う伊勢信仰の相克に関する基礎的研究」（研究代表者：櫻井治男、課題番号 23520088）がある。

ここでは、旧御師（師職）で伊勢神宮の重要な祭祀職であった「大物忌父（おおものいみのちち）」家（岩井田家）伝来資料の、1 万点弱に及ぶ資料の目録化と、同家が檀那場としていた北関東地域（埼玉県北東部～茨城県南東部）の集落における伊勢信仰の現在の状況の解明を試みた。

その結果、旧檀那地では岩井田家との関係が昭和戦前期まで続き、また両者の関係が失われても、近年まで当該地域では伊勢講が継続されて来たことなど実態を明らかにしてきた。

これらの成果の一端は、「館町の御師～岩井田家未公開資料展～」（平成 26 年 2 月、於・皇學館大学）という形で示し、旧御師家の資料、特に近代以降の残存資料の発掘・調査と資料公開・活用の重要性を提言してきた。

伊勢神宮の御師研究については、こ

れまで、明治4年の御師制度廃止以前の様相を解明することに主眼がおかれてきたが、近代以降の御師の変容に関する研究は、資料的な制約があり十分行われてこなかった。しかしながら、岩井田家資料を発掘・分析することを通して、単独例ではあるが、廃止後の御師の実像が徐々に明らかにされつつあることは、当該研究の新たな地平を拓くものと捉えることができる。

但し、岩井田家の当主は、明治以降も伊勢神宮内部の神職としてその立場を継受しており、この点、直接的に伊勢神宮との関係を失った他家のその後がいかなるものかは、個別に資料を参照することが必要となる。

こうした問題意識の過程において、新たに、伊勢神宮内宮前において著名な旅館業を営んでいた、旧師職（中川采女家）の祈祷者名簿・宿泊簿冊類（慶応元年～昭和4年）12点が、櫻井治男に一時寄託され、その資料と神宮文庫等に所蔵の資料とを活用することにより、比較研究が可能となり、当該寄託資料は緊急調査が必要となった。

中川采女家の旧檀那場は北部九州を中心とし、有力な御師であったことは間違いないが、近代以降の同家の役割等については、単に旅館業を営んでいた（現在は無い）という程度のことでの理解に留まっている。しかしながら、新出の資料が示すところでは、北部九州地方からの参宮客を受け入れるとともに、中川采女家以外の旧師職を頼り先とする地域の参宮者を受け入れた役割がうかがわれる。こうした役割がどのような旧師職間のネット

ワーク関係から生み出されるのか、またその場合における「旧師職」としての意識のあり方を分析することで、近代的な伊勢神宮の立場と旧来の参宮習俗にある者との媒介項としての役割を照射することが可能となろう。

研究の目的としたこと

本研究は、日本近代の宗教史における転換期の明治初期に、伊勢神宮改革の一環として行われた「御師」制度の廃止後における旧師職の動向を明らかにすることを通して、伊勢神宮と参宮者との近代的関係の再構築を具体的に検証するものである。廃業時に約700軒あった師職の状況について、その全体像は把握されていない。有力な師職は、自己の資源を活用し旅館業を営み、参宮者の受け入れを行うが、ここでは変革前に見られた宗教的役割は減じ、世俗的な稼業への転換が図られる。

しかしながら、伊勢参宮を行う地域社会にとっては、旧御師への関係意識が継受される側面があり、これらの実態研究は極めて少ない。本研究では、新発見の資料を活用し旧師職と地域社会との関係の再構築の様相を明確にするとともに、研究資料の共有化に寄与することを目的とし、以下の4点を明らかにすることに力点をおくこととした。

(1)新出資料の画像アーカイブ化と内容のデータ・ベース構築及び研究上の共有資料としての活用化の方途を明らかにする。

(2)資料の解読を通して、近代におけ

る伊勢参宮者の動向を明らかにする。

(3)中川采女家の役割と従前の研究で明らかになった他の旧師職（特に岩井田家を対象）との役割関係を分析し、近代における伊勢参宮の時代的変遷を明確にする。

(4)旧檀那地域との関係がいかなる実態的関わりとして継続され、それがどのように変化して行くかを明らかにすることにより、伊勢信仰の近現代の意味を考察する。

研究の方法

研究を進めるにあたり、宗教学・近代史・地域文化研究の専門領域からのアプローチによる研究推進を図る計画を立て、資料の取り扱い及び実地調査等については、研究協力者の専門的な支援を受け研究完遂を目指すこととした。計画と方法は次の4点である。

(1)新出資料の画像取り込みと活用度を高める加工処理を行い、全資料の解読を進め、元旅館資料の中心となる宿泊名簿のデータ・ベース化を行う。

(2)参宮者の出身地と旧師職・中川采女家の配札・檀那地域との同定及び師職廃止後の他地域からの参宮者の出身地と旧師職との関係を明らかにする。

(3)旧師職・中川采女家に関する周辺資料の把握と旧檀那地域における関係資料の発掘と関連付けを行う。

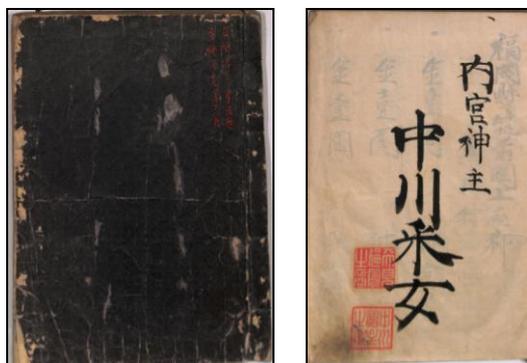
(4)旧檀那地域における伊勢講、伊勢信仰の近現代における実態把握を主眼とした研究を進め、資料内容の精緻な分析に基づき宗教学・近代史・地域文化研究から伊勢参宮・伊勢信仰の近

現代的意味を解明する。

なかでも、中川采女家及び岩井田家資料の将来に向けての保全・活用の基盤を整えることは、研究期間中の喫緊の課題であり、前者については、全資料の画像アーカイブ化を図るとともに、後者資料は全点の目録化の進行に応じつつ、できる限りデジタル写真による撮影・保存を行うこととした。

研究成果

(1)新出資料である、中川采女家の資料については、全簿冊の画像取り込みを完了し、活用度を高める加工処理を行うとともに、資料解読を進め、元旅館資料の中心となる宿泊名簿のデータ・ベース化を終えた（本ニュース・レター、八幡報告参照）。



『御参宮人祈祷姓名簿』

(明治12年3月～明治17年3月)



『参宮記念名簿』

(大正9年1月～大正11年4月)

なお祈祷・宿泊者名簿は、時代が下るにつれ、錦切を用いるなど装飾を施した表紙となっており、芳名録的な様相を帯びている。

資料は、慶応元年(1865)4月から、昭和18年(1943)3月まで、78年間にわたる自家宿泊者の記録簿12冊である。

(2)参宮者の出身地と旧師職・中川采女家の配札・檀那地域との同定に関する分析内容については、八幡報告を参照いただきたい。

(3)資料の保全と今後の活用に向けての成果としては次の4点を報告する。

①中川采女家の資料については、研究グループで画像データ及び資料内容(名簿)を整理したデータ・ベースを作成した。その一端については、ニュース・レターでの紹介や学会等で発表してきた。

②当初、散逸を危惧した中川采女家資料については、本研究を契機として研究チームが寄贈を受けて保管することとなり、研究終了後に関係の図書館での受け入れの方向性が決定した。今後の公開に向けて更なる検討を重ねることとしている。

③中川采女家の近代における状況をうかがう上で参考となる岩井田家資料については、研究期間中に全資料の4割と積算している17,480コマの写真撮影を進めることができ進展を見た。また、それら写真は岩井田家資料の仮目録番号との関連付け作業を行い、今後の当該研究の基盤を整えることができた。

④岩井田家資料については、ご所蔵

者の岩井田家より我々研究チームが、将来皇學館大学への帰属を前提に措置する承諾を得ることが出来、今後目録化が進むことにより、さらに資料の活用度を高める状況へと発展させることができた。

(4)なお、今後の研究課題として以下の4点をあげておきたい。

①中川采女家資料の画像データ及びデータ・ベースの公開について。当資料には、参宮者の住所・氏名・年齢等が記載されており、それら情報をどこまで公開するのかという問題と画像データについては、公開のための環境整備の課題が残されており、今後本研究に関わったチームにおいて検討を続けて行きたい。

②岩井田家資料については、特に目録化作業と写真撮影を如何に進めるか、長期にわたる基礎作業の課題が残されており、その進展に注目して行きたい。

③伊勢と参宮者の関係性にかかる再構築の研究については、近代における制度的な研究テーマだけではなく、本研究が目指した、地域の人々が旧来の伊勢参宮の慣例をどのように変化させて行ったのか、また一方で参宮者を受け入れる「伊勢」の側の問題という観点から文字資料とフィールドワークに基づき実態を捉えるべく研究展開をはかった。今回、その一端に切り込みを入れることは出来たが、両者の関係性において、近代の伊勢神宮が如何なる位置づけとして捉えられていたのかという「神宮観」をはじめとする諸問題は、多角的に検証すべき課

題として残された。今後、膨大な資料内容の分析を進めることで本研究を更に進展させて行きたい。

④明治4年(1872)に御師制度が廃止されて以来、旧師職家において所蔵されてきた資料のうち、近代以前の史料は比較的注目されてきたが、近代以降の家蔵資料への注目度は高くなかった。しかしながら、今後はそうした資料の重要度も高まると考えられるが、旧師職家において世代交代や後継者問題などで資料の廃棄や散逸が更に進行すると予想される。

こうした現在の状況において、資料保全の問題を抱えつつ他事例との比較研究を如何に進めて行くかの課題は残された。

主な発表論文等(最新順)

[雑誌論文等]

- ①谷口裕信「御師廃止後の旧御師と参宮者の関係性再構築—埼玉県を事例として②—」(『ニュース・レター』No.5、2017年3月30日、1-8頁) 査読無。
- ②濱千代早由美「史料紹介 岩井田家資料『留主中心得雑記』文久元年(一八六一)、『皇學館大学研究開発推進センター紀要』3号、2017年3月1日、243-275頁) 査読有。
- ③濱千代早由美「資料紹介 幕末期の伊勢・宇治における御師家の縁組にみるケガレ観—『廉引取之引留』をめぐって、『女性と経験』41号、2016年10月1日、女性民俗研究会、126-136頁) 査読有。
- ④濱千代早由美「岩井田家資料を通してみる北関東」(『伊勢神宮の御師廃止と参宮者の関係性再構築に関する調査研究ニユ

- ース・レター』(以下『ニュース・レター』と略)、No.4、2016年9月30日、1-5頁) 査読無。
- ⑤谷口裕信「御師廃止後の旧御師と参宮者の関係性再構築—埼玉県を事例として①—」(『ニュース・レター』No.4、2016年9月30日、5-9頁) 査読無。
- ⑥櫻井治男「資料紹介:『神洲館』関係資料」(『ニュース・レター』No.4、2016年9月30日、9-12頁) 査読無。
- ⑦齋藤平「【調査報告①】岡山県瀬戸内市牛窓町の伊勢信仰調査」(『ニュース・レター』No.4、2016年9月30日、12-13頁) 査読無。
- ⑧八幡崇経「【調査報告②】佐賀県の伊勢信仰調査」(『ニュース・レター』No.4、2016年9月30日、13-21頁) 査読無。
- ⑨櫻井治男「福岡県糸島市の櫻井大神宮」(『ニュース・レター』No.4、2016年9月30日、21-24頁) 査読無。
- ⑩櫻井治男・八幡崇経「調査報告(4) 山口大神宮・同遥拝所を訪ねて」(『ニュース・レター』No.3、2016年3月30日、1-7頁) 査読無。
- ⑪八幡崇経「神宮文庫所蔵 近代の伊勢神宮参宮記念名簿について」(『ニュース・レター』No.3、2016年3月30日、7-8頁) 査読無。
- ⑫八幡崇経「伊勢信仰の研修会について」(『佐賀県神社庁教化委員会活動報告書平成25年~27年』、2016年3月) 12~14頁) 査読無。
- ⑬櫻井治男「御師制度廃止後の伊勢信仰研究の諸課題」(『神道宗教』240号、2015年10月25日、142~145頁) 査読有。
- ⑭八幡崇経「九州北部における伊勢信仰の近代—内宮旧師職資料の分析から—」(『神

道宗教』240号、2015年10月25日、145～148頁）査読有。

- ⑮谷口裕信「藤村（潔）文書所収の近代伊勢講関係史料について」（『ニュース・レター』No.2、2015年9月30日、1-3頁）査読無。
- ⑯櫻井治男「調査報告（2）北九州における伊勢信仰の様相」（『ニュース・レター』No.2、2015年9月30日、3-7頁）査読無。
- ⑰八幡崇経「調査報告（3）北九州における伊勢信仰の様相」（『ニュース・レター』No.2、2015年9月30日、7-11頁）査読無。
- ⑱櫻井治男「調査報告（1）北九州における伊勢信仰の様相」（『ニュース・レター』No.1、2015年3月1日、1-4頁）査読無。
- ⑲八幡崇経「『中川采女家旧蔵伊勢神宮参宮記念名簿』（仮題）について」（『ニュース・レター』No.1、2015年3月1日、4-8頁）査読無。

〔学会発表〕

- ①櫻井治男「伊勢信仰と担い手の『再構築』という問題について」（第70回平成28年度神道宗教学会学術大会パネル、2016年12月4日、國學院大學・東京都渋谷区）
- ②八幡崇経「地域の『大神宮』と伊勢信仰—北部九州を事例に—」（第70回平成28年度神道宗教学会学術大会パネル、2016年12月4日、國學院大學・東京都渋谷区）
- ③八幡崇経「九州北部の伊勢参宮記念物に見る伊勢信仰の変化」（第69回平成27年度神道宗教学会学術大会、2015年12月5日、國學院大學・東京都渋谷区）
- ④櫻井治男「御師制度廃止後の伊勢信仰研

究の諸課題」（第68回平成26年度神道宗教学会学術大会パネル、2014年12月7日、國學院大學・東京都渋谷区）

- ⑤八幡崇経「九州北部における伊勢信仰の近代—内宮旧師職資料の分析から—」（第68回平成26年度神道宗教学会学術大会パネル、2014年12月7日、國學院大學・東京都渋谷区）

〔その他〕 ホームページ等

皇學館大学研究開発推進センターのホームページ上に、『伊勢神宮の御師廃止と参宮者の関係性再構築に関する調査研究ニュース・レター』（1号～5号）を随時アップした。

<https://www.kogakkan-u.ac.jp/html/research/>

研究組織

(1)研究代表者

櫻井 治男 (SAKURAI, Haruo)
皇學館大学・文学部・教授

(2)研究分担者

谷口裕信 (TANIGUCHI, Hironobu)
皇學館大学・文学部・准教授
齋藤 平 (SAITO, Taira)
皇學館大学・文学部・教授

(3)研究協力者

八幡 崇経 (YAHATA, Takatsune)
呼子八幡神社・宮司
濱千代 早由美
(HAMACHIYO, Sayumi)
帝塚山大学・奈良大学・日本福祉大学・非常勤講師